

## I 実施場所：（図 - 1）

### 1. 移植藻・母藻の採取地

宜野座村大久保地先

具志川市字堅地

### 2. 実験漁場とその特性

前兼久実験漁場：50年度まで、実験地として使用してきた屋嘉田漁場に近接し、大潮干潮水深およそ2 m、底質は砂質帯と砂礫からなり、高さ0.5～1.5 mの岩礁が点在している。波浪やそれに起因する“流れ”は屋嘉田実験漁場よりは小さい。海藻類については、ホンダワラの生育はみられないがイトアミジは冬期には著しく繁茂する。

泡瀬実験漁場：沖縄島東側にある中城湾内に位置し、大潮干潮水深1～1.5 mの平坦な遠浅地帯の中の砂礫帯である。周辺にはアジモ場が点在する。砂礫帯の中の小さな露出岩板にはホンダワラの自生株がみられることから、何ら食害防止等の措置を施さなくとも、着生基質の投入のみによって藻場が形成されるものと予測された。このことが主要な選定理由である。

## II 対象種

ホンダワラ Sp. 1（ツクシモク） 大久保（7，8月）

” Sp. 2（キシウモク） 大久保（7，8月）

” Sp. 3（カラクサモク） 大久保（10，11月）

” Sp. 8 宇堅（7月）

” Sp. 9（ヤツマタモク） 大久保（10，11月）

## III 調査試験経過

前兼久、泡瀬の両実験漁場における調査・試験の一連の経過を表-1にとりまとめて示した。

表-1. 調査試験経過一覧表

年月日	試験地	前兼久実験漁場	泡瀬実験漁場
7 6.	7.1 4	具志川市宇堅地先からホンダワラSp. 8を移植	
	7.2 1	宜野座村大久保地先からツクシモクを基質とともに採取し、保護網の中およびその周辺へ移植。(400kg程度)	
	8.1 7	” ” (同量追加)	
	8.2 5		宜野座村大久保地先から保護網の中へツクシモクを移植(キシウモク・ヤツマタモク混在)。
	8.2 6		” ” 保護網の周辺へ ” ”。
	9.1 4		9月9日の台風17号による保護網の破壊を確認(移植藻はほとんど残存)
	9.2 0	台風17号によって、保護網が南東へ数十m移動、横転し、破壊される。(移植藻はほとんど残存)。	
	1 0. 5	移植藻の葉部が脱落し、茎部のみ残る。	
	1 0. 2 1	大久保地先の礁原上のツクシモク藻場は茎のみになったので、礁湖内のカラクサモク(ヤツマタモク30%程度混在)を基質ごと400kg程度採取し、再度設置した保護網の内外へ投入。この時期にツクシモクの幼芽がすでに密生しているのを確認。	
	1 0. 2 2		ツクシモク茎のみ残る。キシウモク・ヤツマタモクは変化なし。茎のみ残ったツクシモクの下部には幼芽の生育がみられる。
	1 0. 2 5	大久保地先から母藻のカラクサモク(ヤツマタモク30%程度混在)を採取し、ブロック100コに結び付け追加投入する。	
	1 1. 2 4 2 5		着生基質としてブロック100コとワイヤメッシュを投入。(母藻はヤツマタモク?)
	1 2. 1 4	保護網の破損を確認。移植母藻に特別な変化はみられない。(破損した網は修理せずそのまま放置)。保護網から100m以内の底生生物調査。	
7 7.	1.1 8		移植投入箇所から15m範囲内の根石や枝サンゴ死片に幼芽の着生を確認。ブロックとワイヤメッシュには確認できず。
	2. 1	幼芽の濃密な着生を確認。底生生物調査。	
	2. 8	生育状況調査(生育範囲は最大50m)	
	2. 2 3		幼芽の生育範囲は縮小し、生育密度も著るしく小さくなる。
	2. 2 4	幼芽は大きいものでは5cm大に成長。20cm大のSp. 8 5個体も確認。	
備 考		1ブロック当りの母藻の量は1~2kg程度。	